

2025年度 一般選抜Ⅱ期(2/15) 国語 出題意図

大問一 出題意図（問題一全体）

問題文は、文化の本質と異文化接触の意義について論じたものである。文化とは生存手段を超えた精神的営みであり、異質な他者との出会いが自己の文化を相対化し豊かにする契機となることを説いている。グローバル化に伴う排外主義の風潮に対し、差異を尊重し対話することの重要性を、歴史的文脈を踏まえて理解する構想力を問うた。

出題意図（個別問題）

問一：文脈に適した熟語（矛盾、安寧、思索など）を選択する語彙力を問うた。

問二：接続詞。逆接（しかし）、例示（たとえば）、換言（つまり/すなわち）などの論理的関係を把握する力を問うた。

問三：指示語の理解。「そこ（西洋事情）」「それ（自主任意）」など、文脈上の指示対象を正確に特定する力を問うた。

問四：記述問題。「自己のうちに内化していく」という表現について、異文化の衝撃を単に受容するだけでなく、自らの精神的土壌の中で消化し、新たな自己形成の糧とし

ていくプロセスを説明する記述力を求めた。

問五：空所補充。排斥の対象となる「異質なもの」や「他者」を文脈から特定する力を問うた。

問六：語句の意味。「営み」という言葉が、文化的な創造活動や共存の努力を指して用いられている箇所を識別する力を問うた。

問七：内容合致。本文の論旨（文化の意義、グローバル化の弊害、対話の重要性）と整合しない選択肢を見抜く読解力を問うた。

大問二 出題意図（問題二全体）

問題文は、行動経済学の知見を用い、労働意欲と「仕事の意味」の関係を論じたものである。「シーシュポスの岩」の神話やレゴブロックの実験を導入とし、徒労感がいかに意欲を削ぐか、逆に成果の可視化がいかに重要かを解説している。抽象的な寓意と具体的な実験データ双方を結びつけ、労働の質的転換について理解する力を問うた。

出題意図（個別問題）

問一：文脈に適した熟語（無駄、報酬、途端など）を選択する語彙力を問うた。

問二：接続詞。話題転換（ところで）や対比（一方）を示す接続詞を補う論理構成員

を問うた。

問三：指示語の理解。「後者」が指す、完成してもすぐに崩される賽の河原の石積みのような状況を特定する力を問うた。

問四：空所補充。仕事の「金銭的」価値と「社会的」意義、および「非社会的」な状況の対比を文脈から読み取る力を問うた。

問五：対比構造の把握。「残っている仕事」ばかり見ることと、「仕上げた仕事」を可視化することの対比による心理的效果の違いを理解する力を問うた。

問六：段落構成。ボランティア活動などの「無報酬でも意味がある仕事」に関する段落が、論理的にどこに位置すべきかを判断する構成力を問うた。

問七：内容合致。本文の実験結果や主張（金銭のみが意欲の源泉ではない点など）と矛盾する選択肢を見抜く力を問うた。

大問三 出題意図（問題三全体）

四字熟語の構成力と、近代文学作品を用いた文法的な分析力を問う問題である。

出題意図（個別問題）

問一：四字熟語の前半から後半（津々、玉石混交、厚顔無恥、責任転嫁、単純明快）

を想起し、正しい組み合わせを選ぶ語彙力を問うた。

問二：三島由紀夫の文章を題材に、文中の語句（代名詞、動詞、助詞、連体詞、形容詞）の品詞を識別する文法分析力を問うた。